「妄想綴」

『モモちゃん』

九谷　六口

春の暖かい陽気が漂い、桜が満開の姿を楽しませてくれる。
これから暖かい日が続くのではと思っていたが、花冷えが続き、二日前からは、冷たい雨が降っている。

昨日のことだった。
カミさんは、実家に用事があり、九時半に外出する。玄関に立った彼女、猫の鳴き声が聴こえるという。まさかとは思ったが、玄関に行ってみた。ドアを開けると、目の前に猫がいた。驚いている二人を尻目に、猫は玄関に入ろうとする。見れば、綺麗な可愛い猫であり、体長は、二十五センチほどでほっそりとした体付き。毛色は、薄い三毛。子猫のようだ。体を摺り寄せてきた。どうやら飼い猫のようである。しかし、部屋に入ってこられては困る。急いで猫を外に出し、ドアを閉めた。カミさんは、じゃー行ってきますと行ってしまった。
私は居間に戻ったが、猫が気になって仕方がない。野良猫ではないはずだ。では、このマンションの住人の猫なのか。マンションの規約では、猫や犬などの動物は飼ってはいけない事になっている。だが、何軒かで猫を飼っていることは知っている。今のところ迷惑を掛けるような事は起こっていないため、皆、目を瞑っているようである。ま、目くじらを立てることもないと思っているのだろう。

私が住むマンションは三階建てで、各棟の間に階段がある。屋根はあるが外気にさらされている。玄関ドアの前には、半畳ほどの踊り場があり、向いに前の家のドアがある。
つまり、踊り場も外気にさらされている事になる。この日は、冷たい雨が降っており、そこは実に寒い。

一時間ほど経ったが、泣き声は聞こえなくなっていた。自分の家に戻ったのだろうか。ドアを、そっと開けてみた。何と、まだ居る。私を見ると、また、ミャーミャー鳴きながらドアの隙間から玄関に入ろうとする。これは、拙い。鳴き声を上げていなかったのは寒さのせいか、また

は、空腹か……。いずれにしても弱っているのではないか。気になったが手で押し遣り、ドアを閉めた。

まさかとは思うが、玄関の前で死なれても困る。何か飲み物か食べ物を……。いや、餌をあげてはいけない。もしも野良猫であった場合、居ついてしまう。

私は、子供の頃に犬や猫を飼ったことがある。彼らの寿命は人間よりも短い。犬も猫も死んだ。彼らは感情を表す動物である。その時の私の悲しみは深く、何があっても、もう絶対に飼うまいと心に決めていた。もし、生き物を飼うのであれば、せめて小鳥か金魚か……　ま、こういうところが人間の身勝手さである。同じ生き物であり、同じように生命を持っている小鳥や金魚でありながら、死んでも悲しみは、それ程深くはない。

私は、ＰＣに向かい書き物をしていたが、どうにも集中できない。

鳴き声は聴こえない。まさか……。ドアを開けた。猫は、先程と同じ状態である。ドアを閉めたが、心なしか弱ったような感じに見えた。ひょっとして……　これは、ヤバイ。居ついたら困るとのの思いはあったが、仕方なくベーコンを一枚、表に出した。滋養タップリな上等な餌である。これを喰えば寒さも凌げるだろうし、餓死することもないはずだ。

どれほど経ったろうか、そっとドアを開けてみた。何と猫もベーコンもそのままの状態である。ではと思い、ドアの隙間から削り節をあげた。猫は匂いを嗅いだだけで食べない。多少、腹が立ったが、今度は、牛乳を小鉢に入れて出してみた。これまた臭いを嗅いだだけで、興味すら示さない。全く理解に苦しむ猫である。

私は、何故、自分がこのような目に遭うのか考えた。何かの祟りなのだろうか。いや、動物や植物を苛めたりしたことはない。部屋に飛んで来た虫たちも殺さないで、外に逃がしている。もっとも、蚊は別である

が。

私は、私一人が悩むのはおかしいと思い始めていた。そして、二つの可能性を考えた。このマンションの飼い猫であり、たまたま外に出てしまった。近所の飼い猫であり、迷って此処まで来てしまった。

ところが後になって判ったが、私は、この時、重要な事に気付いていなかった。この猫は雨に濡れていなかったのだ。階段には屋根があるため、毛が乾いているのが当然だと思ってしまったためかも知れない。近所の猫であれば、外を歩いたはずであり、また、他の棟であっても同じはずである。猫は、濡れていたはず。それに、足も汚れていなかった。私の考えが浅かったのは、それだけではない。いくら何でも、猫がわざわざ階段を昇り、マンションの三階に来る訳がないではないか。

猫が死んだりしては困るとの思いが、私の冷静さを失わせていたのだ。何とかしなくてはならない。

このマンションの理事会は、毎年、三月に五名の理事が改選される。今は、四月であり新任の理事長が決まったはずである。マンションの飼い猫であれば、理事長と相談し掲示板に告知すれば良い。マンションの管理会社に電話して理事長を訊くことにした。

「もしもし、〇〇マンションの九谷です。××さんはいらっしますか」

当マンションの担当者は女性だ。事情を話す前に、私を覚えているか確認した。私は、総会などでよく発言する方なので、彼女は、私の声を覚えていた。そこで、事情を話し、新任の理事長の電話番号を教えてくれと言った。

「あのー、個人情報の問題がありまして、お教えできません」

私は、一瞬、戸惑ってしまった。何を言っているのだ。私は、新任理事長と同じマンションの住民ではないか。しかも、彼女は、その事を認識している。五人の理事の名前は、部屋番号とともに、一年間、掲示板に掲載される。いくら個人情報の扱いが、最近問題になっているとは言え、事情が違うではないか。

だが、私は文句を言うのを止めた。彼女は、会社の規則に忠実に従っているのであろう。
「じゃー、貴女から理事長に事情を話し、迷い猫がいると掲示板に掲載してください。ところで飼い主が見つかるまでの間ですが……　お宅の会社で預かってくれませんか」
「はー。こちらでですか。ちょっと会社で話し合ってみます」
「前例は、あるんですか」
「いえ、ありません」
私は、半ば諦め掛けていた。
「あ、そう。ま、相談してみてよ」
その時、ひらめいた。区役所、警察、保健所……。
「私は、公共機関に訊いてみるから……」
「わ、判りました」

私は、区が出している「わたしの便利帳」を開いた。当然、迷い猫を受け付ける窓口などは書いてない。総合窓口に電話し、事情を話した。
「では、担当につなぎます」
望みはありそうだ。
「はい、どのようなご相談でしょうか」
男性の声。私は、事情を話した。
「とにかく生き物ですし、ドアの前で死なれても困るんですよ」
「えーと、その猫は、年取っていますか。それとも怪我をして瀕死の状態ですか」
嘘は付きたくない。
「いえ、若いし、怪我はしていません」
「……あのー、そういう場合は、引き取れなんです。犬は別ですが」
「じゃー、どうすれば良いの……」
「何処か、遠くに……」
要するに、捨ててこいと言う。私は、ムカッとした。そんな事、出来る訳がないではないか。相手は、生き物だ。捨ててきた後、私が、どの

ような思いに駆られるか地方公務員は理解していない。私は、電話口でうなってしまった。だが、彼も四角四面に書かれた規則通りに話をしているのだろう。駄目だ。区役所は頼りにならない。私は電話を切った。

次は警察だ。管轄は、△△警察署。以前、手帳を落としたが、それが見つかった時に、世話になっている。なかなか感じの良い連中である。

「あのー、猫なんですが……。死なれても困るし……」
「猫ですか。うーん、犬ですと保健所に連絡してもらえれば良いんですが、猫ねー、ちょっと待ってください。相談してみます」
「このまま、待てば……」
「えぇ、済みませんが……」
電話口から、はい、こちら警察です。どのような事でしょうか……。はい、こちら、ヒャクトーバン……と忙しそうな声が入ってくる。何となく気が引けてきた。
「もしもし、やはり猫の場合の規則は無いですねー。瀕死の状態であれば保健所らしいですが……」
警察官の困った顔が浮かぶ。
「結構、忙しそうですね。ありがとうございました。保健所に訊いてみます」
「済みませんね。そうしてください」
忙しい中、一応、真剣に考えてくれたようだ。よーし、保健所に電話しよう。節目検診などでお世話になっている。

「はい、◇◇保健所です」
三度目の説明ともなれば、こちらも慣れたもの。要領よく話す。
「少々、お待ちください」
だが、私にとって、動物に関する保健所のイメージは良くない。野良犬を捕らえ、処理をするのは保健所である。
「もしもし、その様な場合は、動物愛護センターに、お問い合わせくだ

さい」
　私は、センターの電話番号を控えた。次は、動物愛護センターである。動物愛護との看板を掲げているのだ。猫も動物。これは、何とかなりそうである。私は、期待をして電話を掛けた。男性の声。事情を話す。

「猫ですか。瀕死の状態ですか」
　ちょっと不安な気持ちが湧き上がってきた。
「いえ。寒くて震えているだけです」
「年取っていますか」
「いえ、若いです」
　私には、彼がこれから話すであろう会話が読めてきた。何処かに、と言い出すはずである。
「犬は別ですが、猫の場合ですと、若いとか年寄りに関係なく、死にそうではない状態ですとセンターとしても手立てがありません」
「じゃー、私が、死にそうな猫だと言えば来てくれたんですか」
「えー。でも、一週間告知して、申し出がない場合は……」
　私は、急いで彼の話しに割り込んだ。処分するのである。
「わ、判りました。しかし、どうしましょう。区役所も警察も保健所も駄目。相手は、生き物ですからね。こう言う場合、どこが担当するんですかね」
　彼の口調が変わった。自信ありげに話し出した。
「マンションの管理会社です。例えば、廊下に大きな物が放置されていた場合を考えてください」
　私は、考えた。
「管理会社は、住民に連絡します。それでも申し出る人がいなければ、処分するのは管理会社です」
「ちょっと待ってよ。相手は、猫ですよ」
「生き物でも同じです。一種の遺失物です」
　遺失物？　動物愛護センターの人間が、猫であっても遺失物だという と言う。私は、クラクラしてきた。どうなっているんだ、日本は……。

これ以上、話を続けても、頭のクラクラが増していくだけだ。管理会社には、先ほど電話したと言おうと思ったが、面倒なので止めた。
「じゃー、ここの管理会社は□□不動産ですが連絡してみます」
「あーそうですか。□□不動産でしたら、しっかりしているはずです」
私は、一瞬、そうでもないと言いそうになったのが話しを続けた。
「愛護センターが、管理会社に責任があると言っていると、先方に伝えたいんでですが……。貴方の名前を教えてください」
奇妙な雰囲気が流れた。私は、電話口で彼が固まったのが判った。
「い、いえ、センターに連絡を入れていただければ……。わ、私は、猫の担当ではありませんので、直接は……」
「あ、そう」
ま、こんなものである。
動物愛護センター……。彼らは、愛護という言葉の意味を知っているのであろうか。単に物事を事務的に処理しているだけ。臨機応変に事に当たるなどという教育は受けていない。

いろいろなところに電話してみたが、解決策はなかった。
いや、一つだけあった。何処かに捨ててくれば良いのである。
私は、憂鬱な気持ちでソファーに座っていた。電話が入った。
「はい、九谷です」
管理会社の彼女である。
「社内で話したんですが、社員の一人が猫を飼いたいって言ったんですが……。でも、上司が、仕事がらみだから駄目だって……」
とにかく、彼女も動いてはくれたようだ。
「判りました。ねぇ、俺ってツイてないと思わない。こんな状況になっちゃって……」
「あのー、私……なんと言って良いか……」
「まー、いいや。こっちで考えるよ」

時計を見たが、三時を過ぎている。思いのほか電話に時間が掛かった

ようだ。
　私は、公共機関における猫と犬の扱いの違いを考えていた。猫の場合は、何処かに捨ててこいと言われる。冷たい扱いのように思える。一方、犬は、殆どの場合、保護されるようだ。だが、その割合は知らないが、保護された後、処分されることが多いのではないか。同じ動物であり、両方とも人間の心を癒してくれる。だが扱いは大きく異なる。後に知ったのだが、犬の場合は狂犬病予防法により処分されるらしい。
私は、複雑な思いに駆られていた。どちらの方が幸せなのだろうか。戌年である私は、どちらかと言えば、素っ気ない猫よりも犬の方が好きである。しかし、処理される割合は、犬の方が遥かに多いはずである。野良は別として野生の犬や猫はいない。人間の意志で生きているとも言える。いや、人間の思惑でと言った方が正しいだろう。可愛がられて一生を終わる犬や猫。引越しの際、捨てられる犬や猫。
　私は、改めて犬や猫などは飼うまいと思った。

　腹が減った。いかん、猫！　鳴き声はない。まさか……

　ドアの覗き穴から外を見た。
何と、踊り場に女の子が来た。見覚えがある。前の棟の二階に住んでいる女の子だ。矢車さんの娘さん。
見ていると彼女は、猫を抱いた。そして、猫の頭を撫ぜている。果たして私はどうすれば良いのか……。
　意を決し、私は、ドアを開いた。女の子と目が合った。彼女が言った。

「こんにちは」
「こんにちは。この猫……」
「此処の猫です」
彼女は、向かいのドアを指差した。
「エッ！　芦原さんちの猫……！」
「はい。私、この前、見ました」

急に肩の力が抜けていった。前の家の猫……。
私は、公共機関に電話をし捲った。警察にも……。私は、真剣だった。あれは、何だったのか……。踊り場の寒さが身に染みてきた。

芦原夫妻は、二人暮らし。旦那さんは板前だ。奥さんは、オフィス・レディーだと思う。二年前の大晦日だった思うが、奥さんが、亭主が作ったんです、と鮪の刺身を持ってきてくれたことがある。旨い刺身だった。旦那とは、たまにだが、ゴミ袋を出しに行く時に、顔を合わせることがあるる。
「お宅も?」
「えー、私の方が家を出るのが早いもんで……」
「ま、これからも宜しく」

思いのほか、踊り場は寒い。彼女は、猫を優しく抱いている。
「私、ピンポンしたんです。でも、居ないみたいなんです」
「そうか……。芦原さんちの猫なんだ」
「あっ！　中から猫の声が聞こえる」
耳を澄ませた。確かに、部屋から猫の声が聴こえる。
「二匹、飼ってるんだ」
「そうみたいですね」
「でも、この猫、何処から出たんだろう」
二人で考えたが、踊り場に出られる可能性は玄関しかない。
「私、奥さんかご主人が出掛ける時に、猫が出たのに気が付かなかったんだと思います」

この子とは、何度か階段などで会ったことがある。きちんと私の目を見て挨拶をしてくれる。素っ気ない大人たちに比べると、驚くほどしっかりしている。そう言えば、この子のお兄さんも同じように、キチンと挨拶をする。多分、親の教育が良いのであろう。とは言え、この場を、どうすれば良いのだろうか。外は寒く、しかも、私は昼飯を喰っていな

い。空きっ腹に寒さが堪える。
「芦原さんが帰ってくるのは、夕方だよ。それまで、どうしよう」
「……」
「君んちは、駄目かな」
「お母さんに訊かないと……。でも、今、出掛けているし……」
「そうだよね」
この子とは、挨拶だけで話などしたことがない。一緒に居た方が良いのだろうか、それとも猫を任せて、部屋に戻るべきか……。私は、大人である。そのような無責任な態度は取れない。
「君は、幾つなの」
「十三歳、中学一年です」
「おじさんは、もうすぐ還暦……」
「本当ですか、そんな風には見えない」
「おじさんは、九谷って言うんだけど、名前は」
「矢車桃子です」
「じゃー、桃ちゃんて呼んでいい」
桃ちゃんは、にこにこ笑って頷いた。お爺さんと孫のような二人は、色々な話をした。その間、桃ちゃんは猫を抱いていた。

桃ちゃんは、バスケット部に入っていると言う。ポジションは、センター。身長は、一五十三センチ。どうやらチームには背の高いメンバーはいないらしい。背の高いチームと対戦する場合は、技と状況判断により戦うらしい。
私は、話が合うかどうか心配していたが、桃ちゃんは、しっかりしていた。話す時は、私の目を見て話す。それに、受け答えもきちんとしている。少なからず、私は驚いていた。話が通じるのだ。

私ら夫婦は、子供を作らなかった。従って、子供との話には慣れていない。だが、私は桃ちゃんに気を使うこともなく話すことができた。
「あっ、猫の毛が制服に付いちゃった。私、着替えてくる」

桃ちゃんは、階段を下り、部屋に入った。

私は、不思議な気持ちになっていた。桃ちゃんは、また来てくれると言う。猫を見たが、落ち着いて傍に居る。そう言えば、桃ちゃんと居る間、一言も鳴き声を上げていない。先ほど、鳴いたのは寒さと寂しさだったのかも知れない。

桃ちゃんが来た。すぐに猫を抱いた。
「桃ちゃん、寒くない」
「大丈夫です」
実は、私は寒くて体が震えていたのだ。
「桃ちゃんは、何になりたいの」
「私、美容師さんになりたいの」
「へー、どうして」
「お母さんが、前、美容師やってたんです。だから……」
お兄さんは、最近、ギターを始めたらしい。
「どんなギター」
「茶色いの」
私はクラシック・ギターを弾く。桃ちゃんに、ちょっと待っててねと言い、部屋からギターを持ってきた。
「こういうギター?」
「そうです」
私は、ボロロンと弾いてみた。
「わっ、凄い」
だが、桃ちゃんはすぐに猫に目を遣った。どうも、余り興味を示してくれないようだ。私は、ギターを玄関の中に置こうとしたが、寒くて仕方がない。そこで部屋に入りウイスキーを口に含んだ。

「桃ちゃん、おじさん、寒いのでウイスキーを呑んできちゃった」
桃ちゃんは、別に嫌な顔はしなかった。

「おじさんね……あ、これからは僕って言うね」
桃ちゃんがニコッと笑った。
「僕ねー、昼飯、食べてないんだ。桃ちゃんは食べた?」
「はい、給食……」
私が中学生の時には、給食はなかった。私は、中学時代の想い出などを話した。空きっ腹と寒さ。ウイスキーが、ほど良く効いてきた。どちらかと言うとお喋りな私である。折角、友達になれた桃ちゃんに嫌われたくない。話を控え、今後の対策を話し合う事にした。見れば桃ちゃんも寒そうにしている。それは、そうだろう。いくら若いとは言え、寒い中で一時間以上も座っているのだ。

「この猫は、おじさん……違った、僕の部屋で預かる。そして、芦原さんのドアに、猫を預かっています、って張り紙を貼る。どう思う」
「はい、判りました」
「よし、そうしよう。桃ちゃん、ありがとうね。助かったよ。おじ……、僕は楽しかった。また、会えるといいね」
桃ちゃんは、大きく頷いてくれた。そして、猫を私に渡し、部屋に戻って行った。楽しくも不思議な時間だった。

確かに私にはセッカチなところがある。だが、私が取った態度は間違ってはいなかったと思う。しかし、冷静さを失っていたことを認めざるを得ない。もし、桃ちゃんが来てくれなかったら……。それに、公共機関が規則に反して律儀に引き取りに来ていたら、どうなっていたのだろうか。

猫を抱いて部屋に入った。実に可愛い猫だ。珍しそうに活き活きと歩き廻っている。一言も鳴かない。先ほどの牛乳や削り節を、居間に続く台所に置いたが、やはり見向きもしない。腹は減っていないのだろうか。ところが、私は、腹ペコである。
私は、猫を無視して札幌塩ラーメンを作って食べた。猫は、傍で鼻を

ピクつかせるが、テーブルに手を掛けるだけで、上がったりはしない。躾けが出来ている。まさか、知らない人から食べ物を貰ってはいけないなどと教えられているとも思わないが……。

私は、居間の扉を閉めた。他の部屋に行かれては目が届かない。いくら躾けが良いとは言っても、排泄が気になるからだ。半日以上も飲み食いをしていないが、いずれ排泄するはずである。私は、新聞配達所が読み終わった新聞を入れる厚手の紙袋に猫を入れてみた。ちょうど三分の一ほど新聞が入っている。ここであれば問題は無い。猫は、二、三秒、袋の中で座っていたが、ピョコンと飛び出した。果たして、ここが便所と認識しただろうか。

私は、PCで張り紙を作った。

『ひょっとしてと思い、猫を預かっています。いずれにしても、ピンポンしていただけますか。　九谷』

また、PCに向かいキーボードを叩くことにした。猫は、楽しそうに歩き廻っている。決してテーブルや台の上には行かない。飛び乗るのはソファーや椅子だけである。放っておいても良いようだ。

外が暗くなってきた。

カミさんが帰ってきた。玄関で、猫はどうなった、と声を上げている。私は、黙っていた。カミさんが居間に入ってきた。猫の、お出迎え。

「やだー、家に入れてるの。外に出しとけば良いのに」

どうやらご機嫌斜めの様子である。

私は、桃ちゃんの事も含め、総ての事情を話した。その間、猫はカミさんの傍に付きっ切りである。

「お向かいさんが帰ってくるのは、七時過ぎよ。後、二時間……。ま、いいか」

私は、PCに向かい、カミさんは、自分の部屋に行った。

静かな時間が過ぎた。私は、猫が気になったが居間には居ないようだ。何処に行ったのかと思い、カミさんの部屋に行った。
「猫が居ないよ」
カミさんは、自分のＰＣの前に座っていたが太股を指差した。何と、猫はカミさんの膝の上で気持ち良さそうに眠っていた。
「この猫、どっち?」
「多分、雌だよ。やはり、女の方が安心するのかな」
「まさか。可愛いわね、この猫」
空きっ腹に呑んだウイスキーが、まだ残っているらしく、私は眠くなってきた。居間に戻り、ソファーに横になってウトウトし始めた。

大した時間ではなかったと思うが、カミさんと猫が居間に入ってきた。
「さてと、夕食の準備……。七時だけど、芦原さん、まだのようね」
カミさんは台所に立った。猫は彼女の足元にいたが、冷蔵庫の前に置いてある例の新聞の袋の中にゴソゴソと入っていった。今度は、袋の中で寝るのだろうか。何秒か静かだったが、袋がうるさい、と思ったら、猫がぴょんと飛び出してきた。

やはり眠い。私は目を瞑った。すると、何やら脇腹で動いている。見ると、猫が私の脇腹の上に座っていた。しきりに前足を舐めて顔を拭っている。
「ふふ、今度は貴方の上ね。可愛い猫」
そう言われてみれば、何の遠慮もなく座っている姿は可愛い。私は、そのままで居た。

「ねぇ、何か臭わない」
私には何も臭わない。
「あら、この袋よ……。やだー、ウンコ！　でも、ちゃんと新聞紙の上でしてる。オシッコもしてる」

猫を見たが、気持ち良さそうに脇腹の上で寝ている。
「どうしよう。ねぇ、このままゴミ袋に入れちゃった方が良いわよね」
「うん」
可愛い猫だ。先ほど、紙袋の中に入れたが、ちゃんと覚えていたのだ。

七時半頃だった。階段に足音が聞こえた。
「帰ってきたようよ」
私も耳をそばだてていた。ちょっとの間があったが、ピンポーンとチャイムが鳴った。
「はーい」
カミさんが玄関に行った。
私は、猫を見た。猫は、ピンポンを聞いた途端、床に降り、玄関の方にゆっくりと歩いていった。そして、途中で立ち止まり、背中を大きく丸めて伸びをした。ブルルッと体を震わせ、また、ゆっくりと歩いていく。その姿は、さも、これが当たり前のこととでも言いたげな、落ち着いたものである。飼い主が迎えに来たことが判ったようだ。であれば、走っていけば良いものを……。

「済みません。ご迷惑を……。オシッコしませんでした」
「ちゃんと新聞紙の上にしましたよ。お利巧な猫ですね。可愛いし。あら、お出迎えしているわ」
「コラッ！　お仕置きですよっ！」
「主人が言ってましたが、もう一匹、居るんですか」
「えぇ、二匹、飼ってます。でも、どうやって表に出たのかしら。これから気をつけます」
「可愛いし……。たまには良いですよ」
「済みませんでした」
「この子、名前はあるんですか」
「えぇ、モモちゃんです」

私は、飛び起きた。桃ちゃんとモモちゃん……。

不思議な巡り合わせ……。

翌日、芦原夫妻が、ご迷惑をお掛けしましたと、菓子折りを持って挨拶に来た。

（了）

妄想綴

「モモちゃん」

二〇〇五年四月十五日

編集・発行者　エムツー・プラデオ
三谷　弘

禁無断転載・複写

M²PlaDeO
Planning & Design Office
Copyright© H.Mitani